

「看護学統合研究」 1巻から10巻までの歩み

呉大学看護学部 2008年度紀要委員会
長沼 貴美, 山本カヨ子, 山本 正夫, 山下 洵子

■ はじめに

「看護学統合研究」の初刊発行から10年目、10巻2号を発刊することになった。「十年一昔」というが、「歳々年々人同じからず」。10年のあいだ、編集委員^{注1)}はもちろんのこと、寄稿者や掲載内容（注：1～10巻のバックナンバーをpp.67-75に掲載する）など、「看護学統合研究」に関わる人やコトにいろいろな移り変わりがあった。

記憶は薄れていき、古いことはどんどん忘れていく。過去をたぐり寄せる作業は、いまここで活動している私たちの間で互いの認識を確認し合うことになり、また、記録として残すことでこれからの時代を担う人たちと繋がりをもつことになるだろう。

呉大学は、本年（2009年）4月から広島文化学園大学に名称を変更する。その意味でも、この号は一つの節目となる。新しい大学組織のもとで、私たちのこの作業が有用な資料として「看護学統合研究」の発展に生かされることを願いながら、この10年を振り返ってみたい。（以下、敬称・敬語を省かせていただく。）

■ 初刊発行まで

1999年4月、呉大学看護学部開学部早々、機関誌を発行することが提案された。清水凡生委員長のもと、1巻1号の発行準備に入った。機関誌の創刊というのは大事業であるから、学部をあげての取り組みである。編集委員として6人が名を連

ねた。ところが、第1回紀要委員会で分かったことであるが、委員の誰も編集作業の経験がほとんどないという、何とも心もとない出発であった。

それなのに、こともあろうに、委員長から、ゆくゆくは呉大学看護学部を起点にして中国四国地方の看護関連機関で学会（あるいは研究会）を発足させその学会誌へと移行させる、そのため季刊で発刊する、という方針が打ち出された。それは、当時、国立大学を含め特に地方の大学のほとんどどこからも研究誌が発行されておらず、近隣の看護学部関連機関からも全く発刊がない、という状況をみてのことであった。

そこで、呉大学看護学部の研究業績だけ載せるのではなく、他機関に所属する方も投稿できる形にと、それを満たす投稿規程をつくった。しかし、開学部まもないことで、まだ着任していない教員もいる。しかも、大学自体の歴史も浅くて、知名度が低い。というわけで、多くの原稿がすぐに集まることは期待できそうにないので、とりあえず、年度内に2回、9月と3月に発行することで出発した。

規定をつくるのとほぼ同時進行で、誌名と表紙のデザインなどを含めた雑誌の様式を決める作業に入った。まず、紀要委員会でいくつかの案を作り、教授会に提出した。しかし、承認されず、また修正し……、その繰り返しであった。

例えば、表紙の図柄の初案には、バラの花、幾何学的模様、簡単な縦横の線の中に誌名があるものなどたくさんの候補があった。そのどれも採択されず、また違う案を出し、それも却下……。そ

連絡・抜刷請求先

ながぬま たかみ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

うこうしているとき、突如、呉大学看護学部を取り囲む風景を入れたらどうだろう、という案が出てきた。確かに、呉大学看護学部は地理的に特徴がある。後ろに山があり、前に海があり、民家の間に建つ。学術誌の表紙に地域の景観写真を載せるというのは奇抜であるが、「地域に根ざした」本学の精神と一致する。ということで、この案が異議なく選択された。

しかし、どういう図案にするかは悩みであった。いろいろ検討した結果、地元で活躍中の景観写真家脇山功氏に適切な写真を提供してもらうことになった。

依頼を受けて脇山氏が来校。清水凡生学長補佐室いっぱいパネルと写真集が並んだ。壮大で美しいたくさんさんの写真。なじみの「呉」の風景がいろいろな角度から迫ってきて、その中からただ一つを選ぶのは至難のことであった。やっと3点を抜き出し、教授会で示した。その中から最終的に選ばれたのが、現在まで表紙に使っているおなじみの景観である。

誌名の選定も、これまた難を極めた。既に、学部内から発信する研究業績だけでなく他機関からの投稿も募ることを決めているので「紀要」の呼称は付けられないという点は、皆が早い段階で一致していた。

しかし、それからがなかなか決まらない。看護学研究、看護学総合研究、総合看護学、看護統合研究……など、たくさんさんの候補が挙がった。その中から、同名の和雑誌が他にないことを確かめ、最終的に、教授会で「看護学統合研究」と決まった。そこには、「看護学は近来急速に発達しているが、これには看護学自体の進歩もさることながら、医学、生物学、人間工学、建築学、教育学、心理学、情報学など周辺諸科学を統合して、より発展した看護学を構成してきた結果であるところが大きい。この雑誌には、看護学のみでなく、看護と関係のある周辺諸科学の研究結果も掲載し、看護学を進展させよう¹⁾」という気概が込められている。

表紙の意匠は、デザインの仕事をしていたことがある砂川純子が担当した。そして、清水凡生編集長が掲載文全てのレイアウトを担当し、ほぼそのままの形で印刷できる形に仕上げた。それを原型にして、今日まで、株式会社ニシキプリントにこの体裁を引き継いだ形で印刷を依頼している。

投稿論文は、「総説」「原著」「資料」「報告」「紹

介」などの範疇に分類し、査読を取り入れることを決めた。一方、論文とは別に「交流」の範疇をつくり、看護学周辺のさまざまな話題を随想風に書いてもらうコーナーも設けた。これには、「ことばで自己の“何か”を公表する論文作りは、まさに、実践に繋がる理論の場であろう。その意味をふまえ、よい和文論文づくりの知恵を、特に看護の現場の方々と一緒に生み出していきたい²⁾」という意図があった。

1巻1号は、坂田正二学長（現広島文化学園長）から巻頭言を、各領域の教員から呉大学看護学部へ異動するまでの業績を紹介する原稿をもらい受け、計15編、111頁の構成となった。850部を印刷し、開学部の披露と挨拶を兼ね、他大学図書館をはじめ実習病院などいろいろな機関に配った。

■ 初刊発行後

1巻2号（2000年3月発行）からISSN（International Standard Serial Number、国際標準逐次刊行物番号^{注2)}）を申請し、登録番号1346-0692を受けた。そして、この号から英誌名を表紙の上中央に付け、「看護学統合研究」の配列を変えるなど、表紙のレイアウトを若干変更した。

誌名の英訳であるが、これもまた難渋した。しかし、そのおかげで、私たちは、予想もしなかったことであるが、誌名に抱くイメージが各人まちまちであることを知ることになった。特に「統合」という訳が一致しないのである。看護学を統合するのか、看護研究を統合するのか……。看護のそれぞれの領域をcombineするのか？ joinするのか？ unitedか？ 各分野のinterdisciplinary領域をねらうのか？「These/Antithese/AufhebenのAufhebenだ」などと、ドイツ語まで出てきた。一方、NursingかNursing Scienceか……など、紀要委員会でも教授会でもかんかんがくがくの意見が交わされた。そして最終的に、英語教官のSimon A Fraserの知恵を借り、皆の意見がやっと統合され、Integrated Studies in Nursing Scienceと決まった。

ところで、当初は、中・四国での看護学の情報発信地になろうと意気込んでいたが、「看護学統合研究」発刊後、追いかけるように、多くの看護系大学で機関誌が発行されるようになった。県内の看護学及びその関係学部でも次々に機関誌の発行が始まり、私たちはもはや気負う必要はなく

なった。

とはいえ、「看護学統合研究」は今でも他機関からの投稿も受け付けていて、多彩な著者で構成されている。そして、掲載内容もより質の高いものへ発展しながら、少しずつ社会的にも評価されるようになってきている。

論文には和文だけでなく、英語の投稿もある。また、国内での活動に関する内容だけでなく、海外活動に関する報告も数多い。例えば、バックナンバーをちらと見ても、初刊の「ピナトゥポ火山」を始め、「バングラデシュ」「シンガポール」「ネパール」「イギリス」「アフリカ」……など、多くの号から外国の地名が目に入って来る。

「交流」コーナーは、特に学外からときには韓国や米国といった海外から、あるいは数学の分野や市民団体からの発信もあり、毎号、多彩な話題が提供されている。大学紀要としては極めて開かれた形で、まさに、看護を取り巻くさまざまな分野の方々の交流の場になっている。

9巻1号(2007年9月)から、本学で毎年開催している公開講座の講演内容を「講演記録」として掲載することにした。公開した催しを記録として残し、より多くの人々がいつでも閲覧できるようにしたい、との願いからである。

■ 原著、総説などの分類

実際に編集に携わっていると、寄せられた原稿を原著として扱うか、それとも他の範疇に入れるかの判断に迷うことが多い。一般的な自然科学の論文であれば、それほど困らない。自然科学は、その学問としての長い歴史を通して、国際的にほぼ統一された基準がある。著者向けに制定された原稿作成の手引き、例えば「生物医学雑誌への統一投稿規程」もあり、そうした情報が出版物になっている。またインターネットからも入手できること多いから、かなり簡単である。

しかし、看護学領域の原稿はこうしたガイドラインに沿っていないことが多い。そのうえ、自然科学になじみのない手法が使われていたり、自然科学で基準となる仮説・検証の記述を踏襲していないこともよくある。そのうえ、看護学は、医学や医療の領域に関わる領域であるが、医学論文の多くが自然科学に入るのとは違い、かなりの論文が人文科学や社会科学領域にも関わる。

近い将来、看護学領域でそうしたことを踏まえ

て、適宜のガイドラインが提示されることを期待する。とりあえず、紀要委員会では、4巻1号(2002年9月)の「編集後記」で、論文作成の基礎について提唱した。以下、そのなかで述べられている、原著の範疇に入れた理由を転記する。

「国際看護分野の文献量と研究動向の分析」で著者は「国際看護学」の領域において、「医療人類学」、「医療社会学」、「国際関係論」、「国際保健学」などを視野に入れた包括的な研究の必要性を強調している。「韓国における保健・医療・福祉の現状」においては韓国における保健・医療・福祉の連携を学ぶことにより、わが国における三領域の連携について示唆があたえられる可能性が述べられている。「面接調査から見た結核教室の指導効果」にはこれからの臨床研究の貴重な萌芽が認められた。当大学の研究スタッフとの協同によりさらに質の高い研究の推進が期待される場所である。「21世紀に伝えたい味、残したい食品」によると、意外と伝統的な食形態が地域住民の意識の中に定着していることが明らかにされた。「A Statistical Analysis of the Vocabulary of Medical Research Articles (2)」においては、用語によっては論文の各構成成分(「初めに」、「方法」、「結果」、「考察」など)での分布の違いが見られることがあり、この所見は医学英語の指導者や学習者、更に英語を外国語として使用している研究者にとって有意義なものであると結論されている。

この後も、紀要委員会では繰り返し論文として扱う場合の条件などについて検討を続けてきたが、皆の合点がいくまでには至っていなかった。そこで、本年度(2008年度)の編集委員であらためて論議を重ね、投稿規程を一部改定することを教授会に諮った。そして、10巻1号から原著論文は「新しい事実の発見や解釈」とし、総説は「主題についての文献の体系的なまとめと分類されるもの」と新たに定義を設け、その文言を投稿規定に加えた。

■ 査読の流れ

どのような課題でも、論文づくりは容易なことではない。著者の、投稿原稿として仕上げた営み

の意味を汲み、できるだけ原稿を受理する方向で作業に携わるのが編集委員の役目だと思っている。

査読は当初、査読者名を著者には伏せる形であった。後に一時期、「学部内に切磋琢磨の学術的雰囲気育てるために、査読者と投稿者が互いに見える形にして互いに見解をかわしてもらおう」という編集方針が提案され、そのように実行された。しかし、全ての寄稿についてそのように実行するのは実際には難しいことが多々あり、再び、著者には査読者が見えない形に戻した。現在は、それぞれの著作に対し、学内外の3名に査読を依頼している。できるだけ読み易い学術論文であることを第一義とし、著者の専門とは異なる分野の方にも査読者の一人として入ってもらおうことが多い。

査読に関しては、どこの世界にも汎用性のある原則はないだろう。「看護学統合研究」にも、現在のところ特別な取り決めがない。そんなこともあり、査読者によって実にさまざまなコメントが寄せられる。査読者の建設的なコメントに刺激され、著者の見解が修正されてより価値の高い形になって再提出、となることが多い。

査読者の仕事も容易ではないことを重々承知している。しかし、査読を請け負うことで、査読者も自分とは違う視点に気づかされ、視野をさらに広げてもらう良い機会としてとらえてもらえば、まことに有り難いことである。編集委員も、著者と査読者との中継ぎの作業などを通してそれまで気づかなかった他者の見解や思いがけない人やコトとの繋がりなどを知らされることが多い。

それぞれの原稿の完成までに多くの人の関わり合いがあり、そして最後に完成原稿を目にする読者がある。私たち編集委員は、互いに互いを育て合いながら共に育つ「看護学統合研究」づくりを目指して作業をしている。

■ 電子媒体への移行

大学のホームページが充実してくるに従い、そしてまた時代の要請に合わせる必要もでてきた。そこで、5巻1号(2003年12月)から、呉大学ホームページに全号の内容を、既発行巻も含め掲載することになった。ダウンロードも可能で、論文引用が世界中どこからでもプリントアウトできるようになり、徐々に検索indexへ掲載の依頼が増加している。

2006年8月には、特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会と契約を結び、「医学中央雑誌」に本誌の原著論文は全文、他は題目と著作名が掲載されることになった。また、2007年3月には、株式会社メテオインターゲートと契約を結び、「メディカルオンライン」で本誌掲載文が全て閲覧できる運びとなった。

こうした電子配信に伴い、著作権の帰属を明確にする必要が出てきたため、8巻1号(2006年9月)で投稿規程を一部改正し、「著作権：掲載された論文の著作権は呉大学看護学部「看護学統合研究」編集委員会に属する」と追加した。これにより、呉大学看護学部「看護学統合研究」の著作権が明記されることになった。また、9巻1号(2007年9月)から会告「電子配信対応に伴う著作権の確認について」を巻末に載せ、重ねて著作権への配慮をしている。

また、2008年4月より「広島県大学共同リポジトリ」が稼動した。これは、広島県内の各大学で生産された論文などの教育研究成果を1つの共同サーバーに収集・蓄積し、インターネットを通じて無償で公開・発信する機関リポジトリ(repository)の電子書庫である。運営は、広島県大学図書館協議会が行っている。本学も稼動時より登録参加し、発信の場として利用している。

■ おわりに

毎年度末、呉大学看護学部の卒業生に「看護学統合研究」1・2号を輝かしい未来のはなむけとして贈っている。それは、さまざまな夢や希望をもって飛び立つ若人が、近い将来、現場からの価値ある発信をしてくれることを期待してのことでもある。

どのような分野であろうと、研究の方法はいろいろあり、それを支えている方法論あるいは哲学もさまざまである。しかし、研究を公にするのは、公表する価値を自認してのことである。その価値を著者自身がどのようにとらえているかが、いつも問われる。これからの「看護学」という学問は、「ヒト」で起こる事象を普遍的なものとして追及する「科学」が築いてきた基準にはめ込んで進めていくのであろうか。それとも、時と場が決して再現されない「人」の特殊性に留意しながら、新しい学問体系をつくりあげていくのであろうか。

いま、「教育改革のスローガンである課題探求

能力の育成は、将に看護学研究や看護学教育で求められているものだというをはっきりと認識する³⁾という、この機関誌を発刊した原点があらためて問われているように思う。2009年度から

広島文化学園大学看護学部が発行することになる「看護学統合研究」を、学内外の批判や指導に支えられながら、さらに発展させていく任務の重さをあらためて感じている。

注

1) 初刊からの編集委員

発行年度	巻	編集委員長	編集委員 (誌の掲載順)					
1999	1	清水凡生	藤井宏融	山下洵子	岩本由美	鈴木琴子	中柳美恵子	砂川純子
2000	2	清水凡生	藤井宏融	山下洵子	岩本由美	鈴木琴子	中島優子	信岡利枝
2001	3	清水凡生	山下洵子	藤井宏融	滝沢韶一	竹中和子	岩本由美	
2002	4	清水凡生	山下洵子	長吉孝子	滝沢韶一	竹中和子	岩本由美	
2003	5	山本正夫	長吉孝子	三木喜美子				
2004	6	津田茂子	山根節子	山下洵子				
2005	7	津田茂子	山根節子	山下洵子				
2006	8	津田茂子	松原みゆき	山下洵子	山本カヨ子	山本正夫		
2007	9	山下洵子	長沼貴美	山本カヨ子	山本正夫			
2008	10	山下洵子	長沼貴美	山本カヨ子	山本正夫			

- 2) 逐次刊行資料のタイトルに対する国際的な固有番号で, ISSN ネットワークが管理する。日本の場合, 国立国会図書館が ISSN 日本センターとして ISSN の登録・管理を行っている。ISSN の付与は出版者の申請があって初めて行われる (インターネット: ウキペディアの解説参照)。

引用文献

「看護学統合研究」より引用

- 1) 清水凡生: 1巻1号 編集後記 1999
- 2) 山下洵子: 1巻1号 p.104, 1999
- 3) 坂田正二: 1巻1号 巻頭言 1999